

## 論文審査の結果の要旨

氏名：坂下 将人

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：Ф. М. ドストエフスキー『悪霊』—「鳥」に関する一考察

審査委員：(主査) 教授 上 田 薫

(副査) 教授 山 下 聖 美

講師 清 水 正

坂下将人氏の学位請求論文「Ф. М. ドストエフスキー『悪霊』—「鳥」に関する一考察」は19世紀ロシアの作家フョードル・ミハイロヴィッチ・ドストエフスキーの長編小説『悪霊』に関する論考である。

坂下氏の『悪霊』研究は法政大学での卒業論文（2008年）より一貫して、『悪霊』の原題の問題を中心に論究されている。日本語で主に『悪霊』と訳される Ф. М. ドストエフスキーの原題は“**Б е с ы**”（ベスイ）であるが、1915年に森田草平によって国内で初めて翻訳された際に『悪霊』の表記が用いられ、その後も、米川正夫や江川卓など、ドストエフスキー訳者の多くが『悪霊』を踏襲している。例外的なものとしては中村健之介が「悪鬼ども」と訳している例や、植村宗一訳『憑かれた人々』（ドストエフスキー全集5・冬夏社）などが存在するが定着はしなかった。一方海外では長らく「The Possessed」（英訳）や、「Les Possedés」（仏訳）など、意味としては「憑かれた人々」の訳が主流であった。近年は「Demons」や「Devils」などの訳も見られるが、こうした訳題に対して坂下氏は異議を唱えている。その理由については、この学位請求論文全体が詳細に論究している。

坂下氏の学位請求論文の趣旨と目的を一言で言うならば、『悪霊』という小説の抱える二律背反の本質を、原題“**Б е с ы**”（ベスイ）が内包する問題として究明することである。先述したように日本最初の翻訳は森田草平によるものであったが、これは英訳と独訳からの重訳であり、尚且つ森田と倉田潮との共著『ドストエフスキー』（1926年）が、1916年にマリ、J.M. が書いた『ドストエフスキー』からの完全な剽窃であることが判明して、森田の『悪霊』という訳語の正当性も根底から揺らいだ。そうした背景を有する『悪霊』という題名が、ロシア語の問題、また日本語の「悪霊」という語が有する語感をも併せて複雑な問題を包摂した表記であることは間違いない。坂下氏は『悪霊』という題名が孕んだ問題を、“**Б е с ы**”（ベスイ）と神を意味する **б о г**（ゴーフ）の対比に加え、天を意味する **н е б о**（ニューバ）という語を媒概念として用いて解剖してゆく。そしてその上で『悪霊』の中に多用されている「鳥」に関係する表現に着目することで、『悪霊』世界の二律背反の本質にアプローチしたと言える。

日本に於ける『悪霊』研究は、『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』と比較すればそれ程多いとは言えない。しかしながら、日本語で読める文献で主に『悪霊』を論じたものだけでも二百を超えている。坂下氏はその全てを第一章の先行研究概略で詳しく論評した上で、『悪霊』研究に新たな一ページを加えようとするが、この学位請求論文は清水正による膨大かつ総合的な『悪霊』研究を精読した後に半歩を進める困難と格闘の痛々しい痕跡を留めているということが出来る。これは卒業論文、修士論文も含めて言えることであるが、坂下氏のこれもまた膨大な長さの論考も、内容を詳細に検証してゆくと、遅々として進まぬ苦悩の跡がありありと浮かび上がって来る。それでも坂下氏は『悪霊』研究という土俵を決して降りることなく格闘しようとする。その姿勢は真摯で誠実な研究者のあるべき姿と言える。

この論文は大きく分けて三つの章より構成されている。第一章は先行研究通覧、第二章が **н е б о** に関する神学的・神話学的考察、そして第三章が『悪霊』における「鳥」についての考察である。第一章については既に触れたので第二章・第三章の論考についてその概略を説明する。

坂下氏は卒業論文・修士論文などで展開した『悪霊』の“**Б е с ы**”というロシア語の特殊な背景を踏まえて **н е б о** という媒概念を導入する。**Б е с ы** は **б е с**（ベス）の複数形であるが、この語は『露和辞典』（研究社）によれば、1. 「(人を誘惑し、危害を加える)悪魔、悪霊」、2. 「機敏に動き回る人(物)」3. 「聡明な(機知に富んだ)人」、4. 「(何かよからぬことをしようという)気分、性向、欲」を意味する。悪魔を表すロシア語には、他により一般的な **Д е м о н** (Demon)、**С а т а н а** (Satan) も存在するがドスト

エフスキーは敢えて **бес** の複数形である **Бесы** を選んだ。辞書的な説明では浮かび上がりにくい、この **Бесы** には **Демон** とは違って人々に憑依して誘惑する者というニュアンスがある。これが『悪霊』という作品の孕み持つ重要な要素である。坂下氏は **бес** には聖俗両方向に揺らぐ性質が含まれていることを論考の起点に据える。そしてこれもまた、聖なるものと俗（悪）なるものの両面を含みうる概念 **небо** を原題の問題に接続してゆく。

字数の関係で詳細は省くが、坂下氏の論考は次のようなものである。**небо** (ニューバ) は「ロシア語で「天」、「天国」、「空」を意味する。そしてその複数形は **небеса** (ニェベサー) である。ここで、坂下氏は **небо** を、否定を表す **не** と **бо** と見たうえで **бо** は “**г**” (ゲー) が省略されているが神 **бог** (ポーフ) のことであり、**небо** は神 **бог** (ポーフ) の存在否定を表し、そして更に複数形の **небеса** は否定を表す **не** と **беса** に分解できて、悪霊・悪魔 **бес** の存在否定を表しているとの仮説を提起する。勿論この仮説は古代ロシア語で **небо** が **ес** 語幹名詞に分類されるために、言語形態論的に **не** と **бо** の間で分節することは一旦否定されなければならない。しかしながら、坂下氏は **небо** (ニューバ) の本来の形を “**небог**” (ニェポーフ) として推察できる論拠として、例えば、ロシア語で「ありがとう」を意味する **спасибо** (スパシーバ) の本来の形は

“**спасибог**” (スパシポーフ) であり、それは「神」を意味する **бог** (ポーフ) を内在する語で、かつ「神」を意味する **бог** の語尾 “**г**” (ゲー) が省略された形であり **спасибо** (スパシーバ) は「救う」を意味する (**спасать** スパサーチ、**спасти** スパスチ) と「神」を意味する **бог** (ポーフ) の合成語である例などを挙げている。そこで天を意味する **небо・небеса** という言葉の中に、神を意味する **бог** と悪霊・悪魔を意味する **бес** を読み取ることによって、『悪霊』の舞台が鳥の世界に擬せられている理由を読み解く手がかりができるというのが坂下氏の推論である。この推論から見えて来るものは、神の在所とされる天、即ち **небо** は同時に神が居ない場所と、悪霊・悪魔が居ない場所との両義性を有すると言うのである。その上で、「空」をも意味する **небо** が鳥の在所でもあることによって、『悪霊』が鳥の世界に擬せられる意味がより鮮明になってくると坂下氏は主張する。

更に『悪霊』の舞台となっている「スクヴォレーシニキ」(**Скворешники**) とは、「椋鳥」を意味する **скворец**、また「椋鳥の巣箱」を意味する **скворечник** より考えられた地名とされている。また、『悪霊』の登場人物の形容などに顕著な擬鳥化の表現が見られ、『悪霊』の世界は、恰も **скворечник** 「椋鳥の巣箱」の中で展開される鳥たちの物語の如く戯画化されていると言える。登場人物の擬鳥化の具体を列挙する余裕はないが、天使とも、悪魔の使いとも擬せられる鳥を登場人物として描いた物語と見ることによって、『悪霊』は二律背反する要素が併存する世界なのだという坂下氏の推論が補強されてゆく。先に導入した **небо** 「天、天国、空」もまた、絶対的な神も、絶対的な悪（魔）も存在しない、流動的で、憑依的な空間であり、かつまた鳥の在所たる「空」でもあるという解釈によって、ドストエフスキーの信仰における神の在所たる **небо** の内包せる意味さえもがそこに浮かび上がって来る。坂下氏は先に『悪霊』の原題 “**Бесы**” (単数形 **бес**) が、天国 **небо** (複数形は **небеса**) に含まれるという暗喩的な解釈を通じて、神の在所たる天国の両義性を指摘し、更には神 **бог** が天 **небо** (**г**) に言語形態的に取り込まれているとすることによって、神 **бог** そのものの両義性をも指摘するのである。坂下氏の論考は、結論として、ドストエフスキーは **небо** を念頭に置き、天国・空 **небо** を **небо** (**г**)、**небеса** として解釈することで、天国・空 **небо** という（聖俗）両義的空間に (**не** とともに) 否定的に取り込まれた神 **бог** と悪霊・悪魔 **бес** に於ける **бес** の複数形である “**Бесы**” を原題に選んだというものである。

坂下氏の研究はこのように、語学的考察、神学的考察、更に文学的考察を援用しながら、ドストエフスキーの宗教的意識そのものに漸近するものである。**небо** の解釈に於けるように、語学的解釈の限界を踏まえながら、文学的解釈（直観）に於ける確信を、暗喩的に解読してゆくという方法は、ドストエフスキーのような一筋縄では行かない文学作品にアプローチする方法として決して軽視できない方法論だと思われる。但し、論文の内容・結論にまで及ぶものではないとしても、本論考は文章表現に不必要な重複や、文学表現的に見て稚拙さが目立つ。文章表現は論文の内容の評価そのものに関わるものではないが、表現の拙さは論拠や推論の展開を把握する上での支障となり兼ねず、今後この点に一層留意しながら研究活動を続けられることが望ましい。

結論としては、本論考は上記のように『悪霊』の原題に関する考察と、原題選定の意図に通ずる登場人物の擬鳥化の問題を考察したものであり、先行研究の踏査、研究方法の構成も含め、学位請求論文としての要

件を十分に満たしており、『悪霊』研究に新たな一ページを加えた論考として高く評価できると考える。よって、本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和3年2月1日